

生きもの

DE

すわ

2022年1月18日発行
文・写真・絵 生きもの集め隊 隊長 平野 邦好

諏訪小にいるめずらしい蝶

ムラサキツバメ

前号でカエルが卵を産みに来る横須賀市の小学校があることをお話ししました。諏訪小には、カエルは卵を産みに来ませんが、その代わりめずらしい蝶がすみついています。シジミチョウの仲間のムラサキツバメです。この蝶は元々、関西から西の地域にすんでいましたが、温暖化の影響で北関東まで分布を広げています。諏訪小では学校を建て直したときに植えた、マテバシイの木に卵や幼虫や蛹が付いていたのだと思います。

花壇でよく見かけるヤマトシジミの大きさが12mm程ですが、ムラサキツバメは18mm程あります。普段、はねを閉じて止まるため、この蝶の魅力に気づきにくいのです。オスとメスでは、はねの表側の色が違います。しかし、私自身もオスのはねの表側を見たことがありません。この蝶は、成虫で冬を越します。今頃はどこかの葉のかげで、春が来るのをじっと待っているはずですが、ここ5年間毎年その姿を確認しています。たった5本のマテバシイの中で、彼らは必死に命を繋いでいるのです。



①



②



③



④

① マテバシイの葉の裏に産み付けられた卵。直径1mm程です。

② ムラサキツバメの幼虫。アリに襲われているのではありません。背中から甘いみつを出して、アリを集めて敵からの攻撃を防いでいるのです。共生といえます。

③ 葉の上で休むムラサキツバメ。オスカメスカ分かりません。

④ はねを広げたメスのムラサキツバメ。

⑤ どこでも見られるヤマトシジミ



⑤

水浴び気持ちいい！

シジュウカラ

ビオトープの周りにはスズメより少し小さいシジュウカラがすんでいます。オスメスつがいであるのが普通ですが、諏訪小ではメス1羽だけです。彼女は体に付いた汚れや寄生虫を落とすために、時々ビオトープの川のところで水浴びをしています。

シジュウカラは蝶や蛾の幼虫を食べてくれます。1年間に125000匹も食べた記録があるそうです。こうした虫を食べてくれる小鳥がいるので、林や森が健全に保たれるのです。キンカンにいたアゲハの幼虫がいなくなったのは、彼女の仕業と思われる。

シジュウカラは一度にたくさん卵を産みますが、孵化して一年後まで生き残れるのは10匹中1匹以下だそうです。自然は厳しい世界です。



胸の黒い帯が太いのがオス、細いのがメスです。(⑧⑨は別の場所で撮影)

間違っていた。

ウスバキトンボ

ビオトープが完成したのは2020年9月ですが、池に水を初めて入れたのは8月15日でした。その池からヤゴが羽化したのは10月3日です。羽化したトンボは見られなかったので、ヤゴの脱け殻でアキアカネだろうと思っていました。でも、よく調べてみるとヤゴの時期が短すぎます。孵化する時期も違います。正体はウスバキトンボのようです。

ウスバキトンボは夏頃から校庭など開けた場所で数多く飛んでいるトンボです。昼間はずっと飛び続け、止まることがありません。赤とんぼと間違われますが、赤とんぼの仲間ではありません。止まるとき赤とんぼは水平に止まりますが、このトンボはぶら下がるようにして止まります。世界中に広く分布しているトンボで、春、東南アジアで生まれたトンボが日本に渡り、短い期間での世代を繰り返し、北海道までたどり着きます。しかし、寒さに弱く、日本では冬を越せず全滅してしまいます。そうして、来年の春、また東南アジアからスタートを繰り返します。不思議なトンボです。



⑩池で初めて羽化したヤゴの脱け殻

⑪ぶら下がって止まるウスバキトンボ

⑫水平に止まるアキアカネ ⑬アキアカネのつがい 後ろがメス